

な用事を忘れてしまう可能性が高い。時間をちゃんと守らなければ、他人に迷惑をかけることになるし、自分の社会的評価も下がる。留学の費用は高いから、手帳を使うことで、常に自分の日程をチェックし、その払った学費や時間を無駄にしないかを確認した。〔自己〕確認の機能もあると思う。その他に、毎年手帳は日記を書いてないけど、日記みたい。一年の間にどんなことがあったのかちゃんと記録してくれてる。

【Tさん】⁴⁶

時間を守るライフスタイルをするには、手帳があればこそ。すっぴんかしたりするようなことがなくて心強いと実感している。

追加調査に応じた8名の調査対象者から、時間感覚の変化を確認できた。そのような時間感覚の変化は調査対象者の日本社会への適応につながる。「日本人は時間をちゃんと守るから、自分もちゃんと『郷に入れば郷に従え』にしたから、留学生活はちょっと順調になったと思う」(Bさん)、「後周り日本人皆手帳を使っているから、私も活用してきたということはある意味、自分は日本社会に適応できているということじゃない」(Dさん)、「日本にきて最初は生活習慣やルールなどの変化に不安はあったけど、手帳を使うことで自分の考えを整理することができて、その不安はちょっと和らいた」(Hさん)、「留学期間は日本人みたいに手帳を使わなければ、大事な用事を忘れてしまう可能性が高い。時間をちゃんと守らなければ、他人に迷惑をかけることになるし、自分の社会的評価も下がる」(Nさん)という回答からそのことが確認できた。また時間感覚の変化は調査対象者のパーソナリティの変化にもつながる。「自分のスケジュールをしっかりと管理し、時間を無駄にしないように空いている日に何をすればいいか考えるようになった。時間を守れるようになった」(Cさん)、「手帳を使うことによって、合理的に自分の時間を管理することができた。何事をするのにもばったりならなくなった」(Dさん)、「日程とか書いているうちに、生活の効率が上がった気がしてきた」(Hさん)、「手帳を使うことによって、もっと効率よく時間を利用するようになった」(Jさん)、「留学の費用は高いから、手帳を使うことで、常に自分の日程をチェックし、その払った学費や時間を無駄にしないかを、一種のアラーム的な機能もあると思う」(Nさん)、「時間を守るライフスタイルをするには、手帳があればこそ、すっぴんかしたりするようなことがなくて心強いと実感している」(Tさん)という回答からそのことを確認できた。

手帳は自分の人生の記録にもなる。そのような人生の記録は自分の思い出の変化につながるようになる。「手帳もまた自分生活の記録になっている。私にとっての交換留学は貴重な経験だった。そのときつけていた手帳を読むことで当時のことがよみがえってくる」(Bさん)、「その他に、毎年手帳は日記を書いてないけど、日記みたい。一年どんなことがあったのかちゃんと記録してくれてる」(Nさん)という回答から確認できた。またそうい

う人生の記録はやる気(上昇)の変化にもつながる。「『あの年のあのころ、私はあんなこととしていたな』ってたまに出して読むの。昔勉強すごくがんばってたなって今の自分と連想して、反省するの」(Cさん)、「過去の悪いことを忘れ、成功したことに自惚れないっていう意味なの」(Tさん)というパーソナリティの変化を表す回答があった。

手帳に目標や夢、計画を書くことで、未来に向けてのまなざしが明確化され、やる気(上昇)の変化にもつながることも確認できた。「最初のページに、なりたい自分とか、目標とか書けるスペースとお勧めみたいのがあるんですよ。意外と役に立ちます。手帳って、常に開くんじゃないですか。目標書くことで、見るたびに、なんか後押しされるというか、励まされるというか、もっと頑張れる気がする」(Lさん)というパーソナリティの変化を表す回答があった。

またMさんのように就活手帳を活用することによって、内定を獲得することができたというような回答もあった。「また就活手帳のおかげで、内定をもらった」(Mさん)。手帳を活用することは日本の各種の風習や制度に慣れることを手助けするような役割(日本社会への適応を促進する役割)も果たしているということも確認できた。

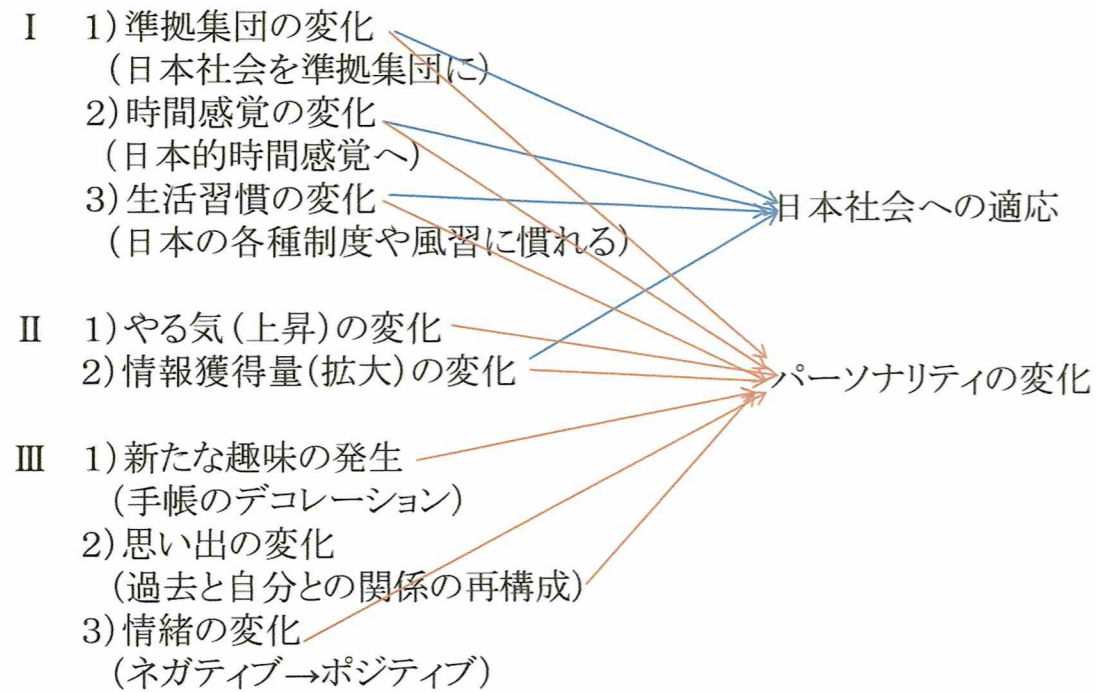
さらに手帳をメモ用の道具として活用する事例もあった。また家計簿をつけること(Qさん、Rさん)、「授業のメモも書くし、実験の結果とか、あと研究に関する思いつきとかですね。手帳一冊持っとけば、忘れた時にメモして、帰った後、再度まとまった内容で整理します」(Jさん)、といったようなメモをすることは、日本の生活における経済、勉強の情報の拡大といった変化を与え、日本社会への適応につながっていると考えられる。

それ以外にも、手帳をつけることは対象者の情緒を調整するような役割を果たしていることも確認できた。「あと怒りの発散として手帳にもつぶやきを書いています」(Rさん)。そして手帳をつけることを趣味として開発するような例もあった。そのことは「かわいい手帳を買うことは楽しいし」(Hさん)というような回答から確認できた。

第2回目の調査結果に基づいた分析を行った結果、「全ての変化は調査対象者にパーソナリティの変化をもたらしていると考えられる。そのうち、日本社会への適応につながるのは他者への意識の変化、時間感覚の変化、生活習慣の変化と情報獲得量の変化だと考えられる」といった筆者の仮説を確認することができた(図3-11)。

⁴⁶ 調査時期及び場所：2015年12月14日(インターネット経由)。

図 3-11 調査対象者の変化と日本社会への適応及びパーソナリティ変化との関係



当初のインタビュー調査の目的は、手帳が調査対象者の日本社会への適応（主に時間感覚の変化）における作用を考察することにあつた。しかし、上記の四象限を使った分析を行ったことで、手帳を使うことは、時間観念以外にも、日本への適応過程の他の側面に、さらに調査対象者のパーソナリティの変化にも影響を及ぼしていることが分かった。

小括

第 3 章では、中国人留学生の「手帳」の使用に関する調査の結果を示し、シンボリック相互作用論の社会化論の観点からその結果を分析した。本研究は鹿児島にいる（いた）留学生と元留学生の 22 名に「手帳」の使用状況について、インタビュー調査を行った。調査は 2 回の期間にわたって行われた。第一回目の調査期間は、2014 年 7 月 9 日から 2014 年 10 月 3 日までと 2015 年 1 月 25 日から 2015 年 2 月 11 日までとなっている。主に調査対象者の手帳の使い方に関してインタビューを行った。第二回目の調査期間は 2015 年 5 月 16 日から 2015 年 12 月 14 日までとなっている。追加調査が可能となった 8 名の調査対象者について、手帳を使用することが日本社会への適応とその過程におけるパーソナリティの変容にどのような作用を及ぼしているかを調べた。

第一回目の調査で明らかになった調査対象者による「手帳」の使い方を 9 つのカテゴリーに分類し、各カテゴリーにもサブカテゴリーの分類を行った。その分類結果は次の通りである。①印象を与える (a. 周りの流れに乗る、b. 特定の人を対象に印象操作)、②日程 (a. 色ペン使う、b. 色ペン使わない、c. 特殊の記号) ③アクセサリー (a. 表紙、b. スタンプ、

c. シール、d. 絵を書く)、④日記 (a. 備忘録、b. 回顧録—読み物；写真アルバムの機能—、c. 自分への励まし)、⑤日程以外の情報の記録 (a. 勉学、b. 趣味、c. 家計簿)、⑥つぶやき (a. ストレス発散、b. 心境の明確化—文字化—)、⑦自分の達成の確認 (a. 到達地点の確認 (作業工程、進捗状況の作成と調整))、⑧未来に向けてのまなざし (a. 表紙に明確な目標の一言、b. 好きな言葉の採録) ⑨手帳の付録の活用 (a. 西暦和暦対応表の活用、b. 就活手帳のガイドブックの活用、c. 地下鉄の地図の活用) となっている。この調査結果を分析するために、船津 (1996) と船津 (2011) を基に、「内的コミュニケーション—外的コミュニケーション」(以下、「内的—外的」と略記) と「道具的コミュニケーション—表出的コミュニケーション」(以下、「道具的—表出的」と略記) の二つの軸から成る四象限を構成した (図 3-8)。この四象限に上記の 9 つの「手帳」の使い方をあてはめると、図 3-9 のようになる。

図 3-8 四象限

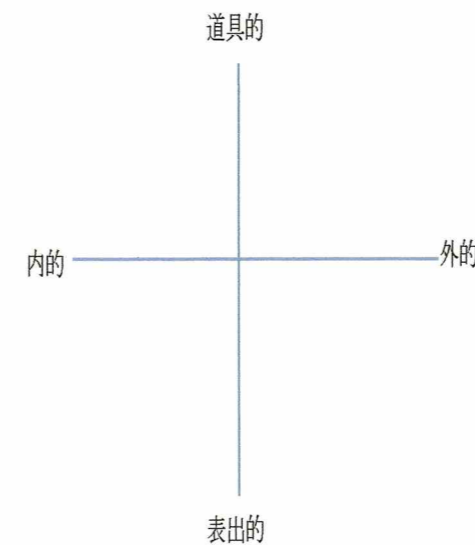
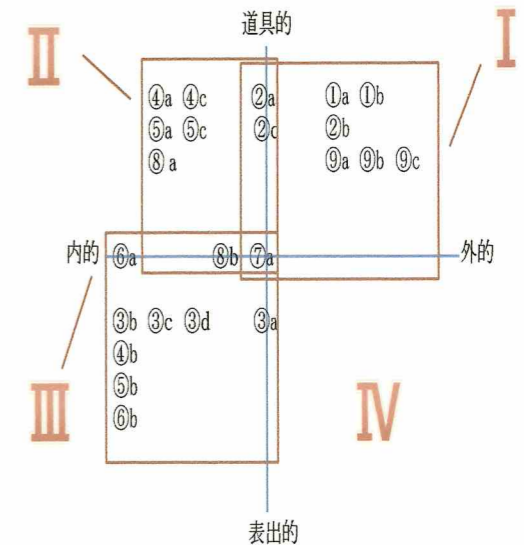


図 3-9 手帳の使い方を当てはめた四象限



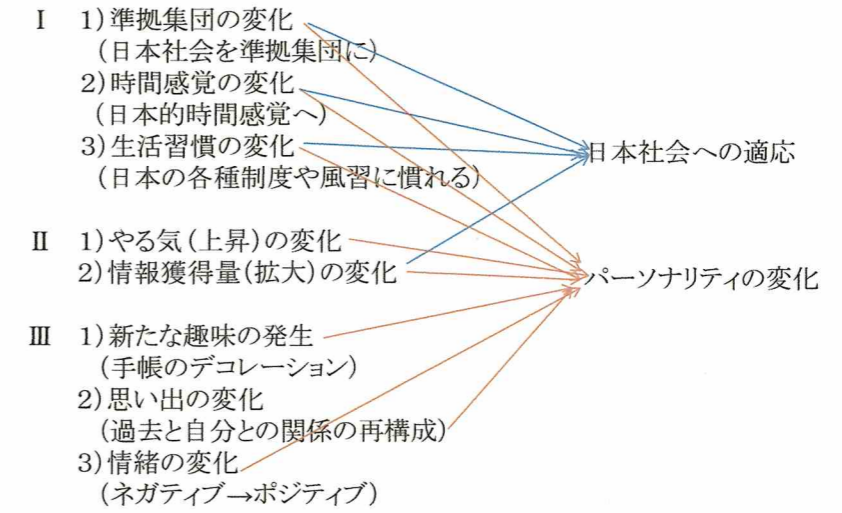
各象限が調査対象者に与えた変化をまとめると、以下のようになる（図 3-10）。

図 3-10 「手帳」の使用が調査対象者に与えた変化

- I 1) 準拠集団の変化
（日本社会を準拠集団に）
2) 時間感覚の変化
（日本的時間感覚へ）
3) 生活習慣の変化
（日本の各種制度や風習に慣れる）
- II 1) やる気(上昇)の変化
2) 情報獲得量(拡大)の変化
- III 1) 新たな趣味の発生
（手帳のデコレーション）
2) 思い出の変化
（過去と自分との関係の再構成）
3) 情緒の変化
（ネガティブ→ポジティブ）

全ての変化は調査対象者にパーソナリティの変化をもたらしていると考えられる。そのうち、日本社会への適応につながるのは他者への意識の変化、時間感覚の変化、生活習慣の変化と情報獲得量の変化だと考えられる。この仮説を基に、第2回目の調査を行った結果、その仮説は以下のように検証された（図 3-11）。

図 3-11 調査対象者の変化と日本社会への適応及びパーソナリティの変化との関係



当初のインタビュー調査の目的は、手帳が調査対象者の日本社会への適応（主に時間感覚の変化）における作用を考察することにあつた。しかし、上記の四象限を使った分析を行ったことで、手帳を使うことは、日本への適応過程において、時間感覚以外の他の側面にも、さらには調査対象者のパーソナリティの変化にも影響を及ぼしていることが分かった。

第4章 手帳：日本社会への適応と現代大衆社会への適応

第1節 準拠集団としての日本社会と準拠集団としての手帳

本来「手帳」は、他者たちとの社会的相互作用において、時間の管理という「外的」な機能を果たすためのものである。実際、調査の分析結果を踏まえてもそのことは当たり前のようには確認出来た。しかし、その本来の機能に加えて、手帳を使う者が自分自身を鼓舞するため、といった「内的」な機能をも担っていることが明らかとなった。「外的」機能において、調査対象者は日本社会（にいる日本人）を準拠集団とし、日本社会への適応を促進していく。「内的」機能において、調査対象者は手帳（に書き込んだこと）それ自体を準拠集団とすることによって、自らのパーソナリティの変化を遂げていく。

第1項 準拠集団としての日本社会

第3章でも述べたように、調査対象者の多くは「周りの人が皆使っているから」、手帳を使うようになった。こうした使い方は調査対象者の日本社会への適応のサインであると考えられる。

来日し、日本のパースペクティブを取得していない中国人は、日本社会という未知の状況に直面するときでも、依然として中国社会から取得したパースペクティブに基づいて思考したり、行動したりする。それに対し、日本にいる日本人は日本社会から取得したパースペクティブに基づいて思考したり、行動したりする。そのようなお互いに相手のパースペクティブを取得していない日本人と中国人が社会的相互作用を行う際に、衝突が発生しうる。衝突するたびに、自分が持っているパースペクティブについて再考することになる。日本で長期滞在するがぎり、衝突をできるだけ減らそうとする中国人は、日本社会で最もうまく衝突なく生活をしている日本人同士の社会的相互作用に目を向けることになるだろう。つまり、日本社会にいる日本人（あるいは日本社会）を準拠集団とすることになる。日本人の日々の暮らしを観察し、多くの日本人は手帳を使っていることに気付く中国人は、最初は皆が手帳を使う理由が分からないかもしれないが、彼らの手帳を使うという行為を模倣することになる。

その衝突が時間感覚によるものである場合、手帳を使っているうちに、日本人の時間感覚を取得し、日本人との社会的相互作用もスムーズにできるようになる。それは一気に達成できるものではなく、日々の社会的相互作用を行う中で、社会的相互作用→衝突→パースペクティブについての再考→パースペクティブの修正・行為の修正→社会的相互作用という過程の繰り返しの結果である。最終的に日本人の時間感覚に関するパースペクティブを取得し、時間感覚における日本社会への適応を達成する。

調査対象者の中には、最初から「日程管理をするため」といった理由で手帳を使い始めた人もいたが、彼らも手帳を使う以前から、様々な社会的相互作用を行い、衝突を繰り返した結果、その衝突は時間感覚におけるパースペクティブの違いによるものであると自ら

先に気付き、周りの日本社会にいる日本人が手帳を使っていることを模倣し、日程管理がうまくできるという形で、時間感覚における日本社会への適応を達成する。

前者—模倣した結果として、日程管理を行うようになった人々—は、日本社会（にいる日本人）を準拠集団とし、手帳を使い始める。手帳を使いながら社会的相互作用を行っているうちに、自己統制し、日本の時間感覚に関するパースペクティブを徐々に取得し行き、時間感覚における日本社会への適応を達成する。後者—初めから日程管理を目的として手帳を使い始めた人々—は社会的相互作用を行い、日本人と中国人の時間感覚に関するパースペクティブの違いに気付き（あるいは日本の時間感覚に関するパースペクティブを取得する可能性もある）、日本社会（にいる日本人）を準拠集団とし、手帳を使い始める。それによって自己統制し、時間感覚における日本社会への適応を達成する。手帳を使うことと日本の時間感覚に関するパースペクティブを取得すること、この二つの行程の順序は異なるものの、日本社会を準拠集団とすることによって、日本社会への適応を達成しているという点では両者に違いはない。

時間感覚だけでなく、他の方面（日本の各種の風習や制度など）における日本社会への適応も同じく社会的相互作用→衝突→パースペクティブについての再考→パースペクティブの修正・行為の修正→社会的相互作用という過程の繰り返しの結果である。手帳はその過程の中で、それを手助けする役割を果たしている。

第2項 準拠集団としての手帳

調査対象者の中で、「日程管理」以外の手帳の使い方をしている人もいる。たとえば、Bさん、Cさん、Hさん、Jさん、Lさん、Nさんは「回顧録」的な使い方をしている。LさんとNさんは「好きな言葉の採録」をしている。Lさん、Pさん、Rさんは「励ます言葉」を書きこむ。Lさん、Nさん、Pさん、Tさんは「表紙に明確な目標の一言」または「週間計画」という活用の仕方をしている。また、Qさんは「心境や気持ちを書く」、Rさんは「つぶやき」を書きこむ。

これらの使い方は日本社会への適応を促進するというよりも、調査対象者のパーソナリティに変化を与えている例であると言えよう。たとえば、Cさんは次のような発言をしている。「『あの年のあの頃、私はあんなことしていたな』ってたまに出して読むの。昔勉強をすごくがんばっていたなって今の自分と連想して、反省するの」。Cさんは手帳を読み返すことで、手帳に記録された過去の「頑張っていた」自分を準拠集団にし、やる気（上昇）の変化が現れた。LさんとNさんは手帳に採録された好きな言葉を準拠集団とし、自分の行動指針を修正するための準拠枠としたと考えられる。また「表紙に明確な目標の一言」という使い方をしている調査対象者は、手帳に書き込んだ未来に向けてのまなざしを準拠集団とし、自己統制していく。「計画」を手帳に書く調査対象者は、日程に合わせて計画を立てる→計画を実行する→社会的相互作用を行う→到達地点の確認→作業工程・進捗状況の作成と調整→計画を立てる、という循環過程の中で、新たな自我を創発していく。船津が

主張するように、人間の自我は「客我」と「主我」の二つの側面を有していて、他者の期待を取り入れ、「客我」を形成すると同時に、「積極性」を表す「主我」の側面により新しさを創発する（船津 2011: 188）。彼らは他者の期待を取り入れることで形成していく「客我」を基に、計画を立てる。手帳に書き込んだ計画を準拠集団とし、他者と社会的相互作用を行う。自分と社会的相互作用を行っている相手の反応と計画の完成度を、主体性を表す自我の「主我」によって、反省したり、進捗状況の作成と調整をしたりする。このように「客我」と「主我」の相互作用によって、新たな計画が誕生する。新たな自我もその計画を実行する中で誕生していく。「心境や気持ちを書く」ことも「つぶやき」を書きこむことも同様に、自我の「客我」と「主我」の相互作用によって、調査対象者にパーソナリティの変化をもたらす。

これらの手帳の使い方をして調査対象者に共通しているのは、手帳（に書き込んでいること）それ自体が調査対象者にとっての準拠集団となり、彼らの行動指針となっていることである。

第2節 第四世代の手帳

第3章の第1節では、手帳の一般的な使われ方をまとめたが、その記述の中に、手帳がその持ち主の分身であることという知見があった。このことが意味しているのは、現代日本社会において、手帳は単なる道具的な意味を超え、「道具的」かつ「表出的」な色彩を帯びてきたということである。このことは日本人だけでなく、今回の来日した中国人に対する調査の事例からも確認できた。前述したように、手帳を「日程管理」以外に使い、手帳自体がその持ち主の準拠集団となっていく事例はその例である。また、Fさんは「趣味のメモ」に手帳を活用する。Bさん、Fさん、Hさん、Iさん、Kさん、Nさん、Qさんの、手帳をシール、スタンプ、絵などにより多彩化する「表出」的な事例も見られた。「一種類のカバーは一冊しかないの。世界にこれと同じのがまだあるかどうか分からないけど、でも一応、他の人とかぶるのはあまりないね」とFさんが語るように、手帳の所持はその持ち主が自分自身と他者を区別する自我の表れとも捉えられる。

アメリカで誕生し、現在日本でも多くの人々に使用されているシステム手帳として「フランクリン・プランナー」が挙げられる。「フランクリン・プランナー」は手帳の名前であると同時に、手帳を販売しているブランドの名前でもある。このブランドでは手帳の変遷を四つの世代に分けている。各世代の手帳の特徴を次のように定義している。第一世代の手帳は単なるメモ、記録媒体としての機能を有しているもので、主にノート、メモ用紙、付箋紙として使われるのが特徴である。第二世代の手帳は第一世代にスケジュール機能を加え、「何をする」という行動計画が機能として加わる。第三世代の手帳はプロジェクトのマネジメントや、目標設定、目標実現に向けた計画など、能率、効率を追求した手帳であり、いかに仕事をこなすかを求めるあまり、逆にストレスや不安が大きくなってしまいうという難点を抱えている。第四世代の手帳は原則を認識し、自らの価値観やミッションを明

確にした上で、目標設定や計画を行う。自分にとって重要な事項を明確にし、人間関係のバランスを取っていく。時計ではなく、人生のコンパスの役割を担う手帳である⁴⁷。

シブタニが主張しているように、多様なコミュニケーション・チャンネルがあることとそれらに参与することの容易さのため、個々人はいくつかのパースペクティブを内面化し、いくつかの社会的世界に同時に属している。「個人は各々、複数の社会圏の独自の組み合わせが交差する、その点に立っている」(Shibutani 1955=2013: 11)。現代大衆社会の多元化・多様化により、個々人は多様なコミュニケーション・チャンネルに接触できる。その多元化・多様化のあまり、自我の獲得が難しくなっている。時に葛藤を経験してしまうことになる。

このような観点を踏まえ、現代大衆社会の自我の外化（表出）の必要性が必然的に現れる。手帳の「第四世代」への変遷はある意味で現代大衆のそうしたリスクの現れであるともいえる。

第3節 課題と展望

これまでの分析を踏まえ、中国人の日本社会への適応において、「手帳」は時間感覚以外にも、日本の各種の制度や風習などの様々の面への適応において、手助けになる役割を果たしていることが分かった。第1章でも述べたように、日本における中国人留学生と中国人労働者が増え続けている中、彼らが日本社会に適応できるかどうかという問題は非常に重要な問題である。中国人の日本社会への適応を促進する道具として、「手帳」が考えられる。さらに、「手帳」の使用は中国人の日本社会への適応を促進することのほかに、使用者にパーソナリティの変化をも及ぼしていることが分かった。多元化・多様化した現代大衆社会において、個々人は自我の安定性を確保できないリスクを負う状況に晒される。そのようなリスクを伴う現代大衆社会においても、自我の安定性や自分探しの道具として「手帳」を捉えることができる。

なお、本研究の調査対象者は鹿児島にいる（いた）中国人留学生・元留学生である。しかし、鹿児島という地域的特性と、本論において調査対象者とした対象者の数的制約を考慮するならば、本論の知見を基に、「中国人の日本社会への適応」の解明に向けた一般化を行うことは、言うまでもなく早計である。またその適応を促進する要素には、「手帳」以外の要素がある可能性も十分考えられる。さらに、今回の調査で、多くの中国人が段階的に「手帳」の使い方（印象操作・日程・アクセサリなど）を開発していくことが明らかになったが、そうした段階的な彼らの「手帳」の使い方の変遷は、適応過程それ自体の段階を反映している可能性も十分考えられる。今後はこの三つの課題を念頭において、さらに調査・分析を進めていきたいと考えている。

⁴⁷ 第4世代ツール「フランクリン・プランナー」

<https://archive.is/v1eUL> Accessed: 2016年1月30日 02:54:56 UTC.